

る、一つの管みに外ならない。

「記述にあたっては、隠岐の主要方言の一つである、五箇^{ゴカ}の方言を中心にすえる。五箇は「島後」の最北端に位置する農村である。山地を背負って海に面した、孤立しやすい土地がらであって、その方言も、一段と古色を見せるのが一般である。

一

ここに、「ワ」類文末詞と言うのは、隠岐で言えば、「ワレ」「ワリ」「ワイ」「ワ」、およびこれらと他要素とが複合した、諸形一派を指す。「ワレ」「ワイ」など一連の事象が、自称の代名詞系のもの、特に「われ」に深い関係を有するものであることは、すでに周知の事実である。このような自称代名詞系の文末詞は、諸相を示しつつも、国語の多くの方言に存するもののように、その、全国にわたる存立状況については、藤原与一先生のご研究によって見ることもができる（日本語方言文法の世界―昭和44―一九九頁以下参照）。

さて、隠岐に盛んな「ワ」類文末詞を記述するにあたっては、はじめに、「ワイ」をとりあげようと思う。五箇では、これが、次のようにおこなわれる。

○サトノヤナ ワイ。

砂糖のようだよ。△雪を見て▽

○コトシワ クサツ タ ワイ。

今年は腐ったよ。△芋の話▽

○カノワノ ワイ。ナンボー チカラー デーテモ。

△あいつには▽勝てないよ。いくら力を出しても。

右の諸例に見られるとおり、文末の「ワイ」は、叙述内容にかかわる判断を確認、これを主張する心意をうち出すのがつねである。このよ

うな自己表出の作用は、自称の代名詞に出自を求め得る事象――「ワイ」の、当然の機能とも言える。相手に焦点を定めつつ、自己を表出・主張していくのである。

「ワイ」が、自己の動作・作用に関する叙述を受けて立つときは、

○ワカツチョー ワイ。

わかつているよ、ほんとに。

のように、反撥の気もちの、強くあらわれた表現をしたることがある。この種の表現に立つ「ワイ」は、例文のとおり、「ワ」にアクセントの山をおいた、強い調子のものであるのが一般である。「ワ」を卓立せしめてのち、急下降する音調には、反撥・不満の感情が、よくうち出されている。広く各年齢におこなわれる言いかたであるが、しぜん、子どもなど、若い世代での使用が目だつ。若年齢に見られがちの、むき出しの反撥の生活の厚さが、ここに反映しているようか。

概して、「ワイ」は、後述する「ワ」に比して、陰性であり、内向的である。時に、分別くささの認められる表現をしたてる。自己をうち出す働きが、いっそう深いとみられよう。

前述の「ワイ」など特定のもの、若い世代にやや目だつとはいえ、総体的には、「ワイ」は、中年層以上に多く見出すことができる。

以上は、五箇での状況であるが、「ワイ」は、五箇に限らず、隠岐全域でおこなわれる。次には、五箇の西南部に隣接する都方村^{ツツ}での実例をとりあげよう。

○ナント マツト ナガエ ワイ。

いやどうも、待つとなると長いもんだよ。

バスを待っていた中年の男性が、待ちくたびれて、ほとんど独白的に発したものである。話し手の特別の感情が、いくらかの詠嘆味を帯びて、表出されている。

○シツチヨル ワイ。

知っているとも。

○ヨル ミニヤ ツマラス ワイ。

夜、見なければだめだよ、全く。

これも、都万での、少年男子の実例である。先に、五箇での、「ワイ」の音調をとる事象の、反撥・主張の表現性について述べた。右の実例にも、同様に、強い自己主張の感情が認められる。二例の場合それぞれに、話し手の、判断をあらわす叙述を包摂して、反撥的な色調の濃い表現を生んでいるのである。

「島後」南東部でも、「ワイ」は、

○コシラウ コトー シランデス ワイ。

作ることを知りませんよ。

のようにおこなわれる。これは、旧磯村（現西郷町大字磯）での一例であるが、総じて、「島後」の「ワイ」は、前述の五箇・都万地区を含む北西部一帯にあって、観察されやすいようである。

「島前」^{ドクセン}にあっても、「ワイ」の立つ表現は、次下のようにとりあげられる。

○モドレーデ クロー シタ ワイ。

帰れなくて苦労したよ。

○エーモンガ アツタ ワイ。

いいものがあつたよ。

○ワラワレー ワイ。

笑われるよ。

第一例から、海士町・西の島町・知夫村での実例である。いずれの「ワイ」も、自己表出のかなめに立っていて、先に討究したところに類する機能を見せている。

○ハエテヘン ワイ。

入りはしないさ。

海士での一例である。自己の行為についての宣言・主張で、例の「ワイ」の音調をとっている。こうあって、反撥的な色調を帯びることも、「島後」で見たとくちと交わりない。

二

ついで、「ワ」文末詞をとりあげる。これが、「ワイ」に類縁の事象であることは、多く言うまでもない。五箇では、これが、次下のようにとりあげられる。

○オカシテ モテノ ワ。

おかしくてたまらないわ。

○トートー クサリマシタ ワ。

とうとう腐りましたよ。

○カナラズ マイリマス ワ。

必ず参りますよ。

ここにおこなわれている「ワ」も、おおむね、話し手の思いを、最後に表出する機能を果たしている。ところで、前述した「ワイ」に比較すると、その機能も、いくらか軽いものになっていようか。自己をうち出しながらも、相手への訴えかけ・呼びかけ、さらに言えば告知の働きが、いっそうまざっていると認められる表現が少なくない。右の第二・三例は、その告知の姿勢の、かなり明らかなもの

と言えるのではないか。出自のいかんにかかわらず、文末に慣用される特定要素は、それぞれに、相手への訴えかけの働きをになうものであることはむろんであるが、当面の「ワ」は、「ワイ」以上に、その働きが目だっている。この観点からすれば、文表現における訴えかけ成分としての「ワ」は、文末詞の特性を、いっそうよく保有し得ていると言えようかと思う。

○ヨソカラ ドット クツデス ワー。

内地からうんとやってきましたよ。△獵師▽

○アカーチヨリマス ワー。
赤くなっていますわね。

このように、長呼の「ワー」のおこなわれることも多い。こうあれば、話し手の詠嘆味・感慨の、よくあらわれた表現となるのが普通である。

「ワ」の立つ表現は、「ワイ」の立つ表現に比して、陽性であり、外向的である。「ワイ」の立つ表現を、陰性で、内向的と見たのと対照的である。品位も、「ワ」は、「ワイ」より、いくらか上位にあるとみられる。先掲の文例によってもうかがわれるように、「ワ」は、敬体の叙述を統轄しておこなわれることも少なくない。「ワイ」には、このような事例がなくはないにしても、きわめて少ない。「ワイ」は、土地人同士、さらには家族同士の会話に用いられやすく、これがおこなわれれば、概して気やすい物言いとなるのが普通である。特定の音調をとる「ワイ」が、時に反撥的な色調の濃い表現をしたことがあるのも、先に指摘したとおりであり、この事實は、また、「ワイ」「ワ」両事象の表現性の差を、よく物語っているように。

「ワ」は、隠岐全域で、活動が著しい。

○ミナ エタワシ ワー。

みなかわいそうだよ。

○キリキリ ハシルガ ナオリマス ワー。

きりきり痛むのが治りますよ。

「島後」南部地方の、旧中条村ナカジョウ（現西郷町大字中条）および旧磯村での実例である。

「ワー」と長呼される例も、全域に見い出される。なかでも注意されるのは、「島後」北部の旧中村（現西郷町大字中村）で見られる、

○パーマ カケチョー ワー。

パーマをかけているよ、まあ。△パーマかけだちの女性をひやかして▽

○デブダ ワー。

太っちゃだねえ。△筆者を見て▽

のような、「ワー」の音調をもつ言いかたである。ここには、現前の事実に触発されての、驚き、詠嘆が、直線的に表出されており、一文は、ごく明るいものになっている。この点、「ワイ」が見せる、屈折的な強い自己主張とは、対照的である。主として若い層、それも女性におこなわれることの多い習慣的なもので、ここにも、「ワ」の、表現性の一斑を見ることができよう。

「島前」でも、「ワ」はよく活動している。

○キチヨリマシエン ワー。

来ていませんよ。

○オレ シマシエン ワー。

居りはしませんよ。

海士および西の島での実例である。

三

上來、記述してきた「ワイ」「ワ」に類するかと推測されるものに、「ワレ」「ワリ」があり、主として「島前」西の島の中部地区（美田部落その他）におこなわれる。

○ソコニ アン ワレ。

そこにあるよ。

○ソケ スリヤ ワー ワリ。

そんなにすると悪いよ。

○キヨーワ サービ ワリ。

今日は寒いよ。

このように言う。右の「ワレ」「ワリ」兩事象にあっては、「ワリ」が「ワレ」の転訛形とされようか。実際にあたっては、この「ワリ」の方が、中年以下の若い層に見られがちで、しかも、実用の頻度も高い。

右の事象が、自称代名詞「われ」系と考えられるのは、その形の類似と共に、意味作用の類縁性があげられる。ここには、自己表出のきわだった働きが指摘される。この点に関して実例を見ていくと、例えば、相手の問いかけに対して、否認の意志を表出する場合にも、この文末詞の立つ表現形式によることがある。すなわち、「手を貸そうか。」という相手の申し出に対して、

○エー ワリ。

いいよ。（その必要はないよ。）

と応じることがある。「行かないか。」というさそいに対しては、

○キヨーワ ダエコンノ タネ マク ワリ。

今日は大根の種を播くんだよ。A行けないよ。V
などと応じる。文末の「ワリ」には、自己の想念が、よくうち出されていよう。

さて、以上の「ワレ」「ワリ」は、わりと女性によく見られ、一般には、女性ことば——として意識されているむきがある。この事象は、「ワレ」「ワリ」の、特殊な生きかたを思わせるが、また、これらの事象が、文末詞「スー」と複合しやすいという事実も、見逃すことはできない。

○ヨート・ミー ナ。アン ワリスー。

よく見なよ。あるじゃないの、ね。

このような状況である。「スー」は、あるいは指示代名詞「それ」にかかわるものと疑われるが、まず、女性におこなわれ、品位がよい。熟合した「ワレスー」「ワリスー」も、後部要素の「スー」本位に、女性ことばとしての地位を保っている。単独の「ワレ」「ワリ」も、「ワレスー」「ワリスー」にかかわる事象という、潜在的な意識があつて、そのような意識のもとに、おこなわれるということもあるのではないかと考えられるのである。

「島前」の西の島の東部（上述の美田地区に隣接する東地域）、および海士には、「ワテ」が存する。土地人の意識では、この「ワテ」を、美田地区の「ワレ」「ワリ」と対比して受けとっているかとみられるふしがある。それにしても、「ワテ」は、「ワ」と「ワテ」とが複合して成った文末詞とするのが妥当であつて、「ワレ」「ワリ」と単純に対比されるべきものではない。が、そのような土地人の意識にも、看過しがたい一面がひそんでいる。

注、「ワテ」は「ワタイ」（ハワタシ）の転化形かとも疑われるが、いまはしばらく、複合形とみておくことにする。

「ワテ」の「テ」は、「といえば」の縮約形かと考えられる。ここには、また、「といえば」の意味作用によってもたらされる、特別な自己主張の働きが認められ、この文末詞の立つ一文は、話し手の強い感情によって特色づけられるのがつねである。「ワ」と「テ」との結合は、いわばあい似た機能をもつ事象同士の結びつきであって、その点、自然合理とも言える。

○キヨーワ ヌーキ ワテ。

今日は暑いよ。（暑いったらないよ。）

○ココロニ オー ワテ。

ここに居るよ。（居るったら）

西の島東部地区および海士での実例である。後例ハ海士例Vは、うるさく呼ばれたのに対しての、応答の文である。話し手のいらだちが、「テ」の卓立、および長呼の音相に、よくあらわれていよう。このような「ワテ」が、「ワレ」「ワリ」と対比されることのあるのは、一方から言えば、「ワレ」「ワリ」の、自己表出の顕著な表現機能を物語ることにもなるう。ともあれ、これらの特異な文末詞が、それぞれの分布領域を保ちつつ、「島前」の中部および東部地域に、ほぼ限って存立するのは興味深い。

藤原先生は、文末詞の「ワレ」が、「四国方言領域の東部や、近畿方言・中部方言に」存することを指摘していられる（「日本語方言文法の世界」二〇〇頁参照）。また、「ワレ」の転訛形である「ヤレ」が、「中国方言内（北がわ）にも」見られるとされている（前掲書二〇二頁参照）。そう言えば、筆者も、鳥取伯耆の海岸地方で、

○コイ ヤレ。

来いよ。

のような例を得ている。このような、類縁事象の分布を見ると、隠岐の「ワレ」も、決して孤存の事象とは言えないのである。

四の一

「ワ」には、次のような複合形がある。

ワナ ワノ ワナノー ワナナー

ワテ ワテナー

チョワ チョワナ

ここで注意されるのは、「ナ」「ノ」など、感声的な文末詞を後接させた、複合形が繁栄していることである。ちなみに、「ワイ」に関する複合形のない点も、ここに指摘しておくことが有効である。

右の複合形のなかで、全地域にわたり、最もよく活動しているのは「ワナ」である。その「ワナ」は、次下のように存立している。はじめに、五箇での状況を見ることにする。

○ワレテモ フレテモ キノベダ ワナ。

△船がVゆれてもゆれても気暗らしたよ。△船酔いしない老婆の強がりV

○ワチデ ナーテ ヨカッタ ワナ。

自分の家でなくてよかったよ。

○ナント ススドイ コダ ワナ。

なんとまあ、悪賢い子だよ。△幼児の成長の早さを感じずるほめことばにもなる。V

「ワナ」は、右の諸例のとおり、「ワ」に類する自己表出の機能をもって存立している。先に、「ワ」が、「ワイ」に比して、訴えか

けの働きの、いちだんとまさっている点を指摘したが、当面の「ワナ」は、さらに、呼びかけ性の強い「ナ」を摂っていて、相手へ、はっきりと焦点を定めた言いかたになっている。この「ナ」の機能が生きて、「ワナ」は、また、いっそう親しき・心やすさをうち出ししていると言えようか。

○ナンニンモ ボロケマス ワナ。

△年どし▽何人も△海に▽落ちますよ。

○デンジモ アツデス ワナ。

△田地もありますよ。△隠岐の島内に▽

このように、「ワナ」が、敬体の叙述を受けておこなわれることも、かなり目だっている。右は、古老が、筆者に語った例であるが、他国人に対する改まりのなかにも、うちとけた気やすさがうかがわれる。

「ワナ」は、上掲の諸例に見られるとおり、低い調子の音調をとっておこなわれることが多い。全年層に存する。

○ゲンコ ハラエル ワナ。

△そんなことをしたら▽筆骨でなぐられるよ。

少女の発言である。このようにあって、どの年層でも、日常盛んである。

以上は、五箇での存立状況であるが、「ワナ」は、隠岐全域によく分布している。

○ヤー。マチチョツタ ワナ。

やあ。待っていたよ。

○ハマグリガ オー ワナ。

蛤が居るよ。

五箇に隣接する、都万および中村での実例である。「島後」南部地域でも、例えば、

○リツパニ アラー ワナ。

きれいだらうよ。

などがとりあげられる。旧東郷村（現西郷町大字東郷）での一例である。「島前」からは、知夫での実例をあげよう。

○オヘンドサンワ アバカヌ ワナ。

お通路さんは多いことだよ。

四の二

ついで、「ワノ」を見よう。五箇では、この文末詞は、あまりおこなわれないう言ってよい。「ワナ」の盛行に比して、注意される点である。

○ミナ シジヨースンガ キテ オガマツシャル ワノ。

△葬式でも▽みな神主さんが来て、おがまれるんだよ。

このような例が、わずかに見出しされるにとどまる。一方に、「ワナ」が繁栄している事実からすれば、「ワ」と「ノ」とは、結合しにくい、何らかの事情が存したかと考えられるのである。

「ノ」「ナ」は、共に感声的な文末詞として、あい似た表現機能を見せ、隠岐全域でよく活動している。しかも、両者は、ほぼ五分五分の勢力をわけあっていると言ってよい。ただ、品位の点で、両者に差が認められ、「ノ」が高く「ナ」が低いと判定することができる。この品位の差が、当面の「ワ」との結合にあたって、一定の役割りを果たしたかと想察されるのである。

「ワ」は、既述のとおり、自己主張の基本的な色調が認められるだけあって、概して品位は高くない。これと、「ナ」との品位が近

似し、しぜん、両者は、互いにひきあつて結合しやすく、日常の表現生活の場におこなわれることも、度重なつたかと考えられるのである。一方、「ノ」の備えている品位は、「ワ」の品位と適合しにくかったと言つてよからうか。このことに関連して、次のような事實をあげることができる。すでに述べた「島前」東部地域の「ワテ」であるが、この事象もまた、「ナー」を後接させることがある。

○エーワテナー。

いいよねえ。

海士の一例である。ここでも「ワテ」は、しぜん「ノー」よりも「ナー」をとりやすい。この場合、「ナー」と「ナ」を同列に見ることは問題だとしても、「ワナ」の盛行は、右のような事実と、あい連ねて把握することも有効かと思ふのである。

なお、「ワナ」の繁栄を支えるものとして、また、「[Wana]」と (a) 母音の重出する音相の、文末要素としての安定のよさも、何ほどか作用していると言えるかも知れない。それはしばらく言わないとしても、「ワノ」とは比べるべくもない「ワナ」の完全に、改めて注目をさされるのである。

「ワノ」は、「島後」東部一帯では、いくらかままとまっている。その代表地域、旧中村での実例をあげよう。

○マーシタワノ。

もうしたよ。(もうし終わつたよ。)

○オタニナラノワノ。

歌にならないよ。△下手な盆歌をひやかして▽

いずれも女性の発言である。全階層におこなわれはするが、やや女性の使用が目だつ。「ノ」を後接しているだけに、いくらか品位が

よい。その点が女性に支持されたのであろうか。

○ナガエワノ。

長いよねえ。

○ジエンジェチガウワノ。

しぜん違うよねえ。

右の「ワノ」は、上來述べてきた、熟合の相の明らかな「ワノ」とは、その表現性がいくらか異なっている。すなわち、「ノー」は「ワ」を包んで、高次の呼びかけに立っているとみることができるのではないか。この、「ワ」と「ノー」との、次元の違いを示す徴表は、「ノ」のうえに認められるアクセントの山である。こうあれば、「ノー」は、相手に呼びかけて、その共鳴を期待するという、「ワ」とは別次元の働きを備えているさまが、明らかである。この観点からすれば、右の、「ワノ」における「ワ」と「ノー」とは、結合度が浅いと言つてよい。いわば、「ワノ」は、「接合形」(↓「複合形」)とするのが適していようか。

さて、以上のような「ワノ」(「ワノ」も)の見られる中村地区にあつても、「ワナ」の方が一段と優勢である。

○ソゲデゴザンシヨワノ。

そうでございましょうよ。

「島前」海士での一例である。「島前」でも、「ワノ」は、全般に少ない。

四〇三

「ワナノ」「ワナナー」は、同種の文末詞(ナ行音文末詞)があい接しつて注目される。五箇では、これが、次のように存立している。

○タツタ タビダケデス ワナノー。

△冬はVただ、足袋だけですよねえ。

○シェーフモ コタエタ モンデス ワナノー。

政府も頭の痛いことですよええ。

○ナカー アウカエヌ ワナノー。

△田のV中は歩かれないよねえ。

右の諸例は、「ワナ」による自己主張を、そのまま相手にもちかけて、共鳴共感を期待するおもむきの表現である。すなわち、「ノー」は、「ワナ」を包んで、高次の呼びかけに立っていると解される。このような、いわゆる接合の形式については、すでに、前項の「ワノー」の場合にとりあげた。当面の「ワナノー」も、形式上は、同じ呼びかけの機能をもって立つ、感声的な文末詞「ナ」「ノー」が接合して、特異を思わしめるが、機能論的な観点に立てば、「ワナ」と「ノー」との、次元の相違が指摘されるのである。

五箇であって、「ワナノー」は、主として中年層以上に、日常よくおこなわれている。右の形式の文末詞は、「鳥後」一円に見い出される。

○アルジャラー ワナノー。

あるだろうよねえ。

都万での一例である。「鳥前」ではきわめて淡く、ほとんど見かけないと言つてよいほどである。ところが、知夫で、別の次の一例を得た。

○エツト シェワガ ヤケル ワナナー。

たいそう世話のやけることよねえ。

「ワナナー」のおこなわれた例である。二つの「ナ」が接して特異

であるが、実は、この末尾の「ナー」も、「ワナ」を包んで、高次の呼びかけに立っている点である。その点で、前述の「ワナノー」と、類同形式と言える。この「接合形」も、他地域では、現在までのところ見出し得ていない。

さて、以上の事象にあつて、高次の呼びかけには、「ナー」よりも「ノー」の、主として立っている点に注意される。前項の「ワノー」の場合も、また同様である。新たな呼びかけの意識に基づいて、おのずから、品位のよい「ノー」の選ばれるのは、待遇の表現の理にかなうものとして、興味深く観察されるのである。

四の四

「チョワ」「チョワナ」は、伝聞の機能をもって立つ文末詞である。その前部要素である「チョ」は、「と」というの、縮約して成つたと推察されるもので、伝聞表現を成立せしめる顕著な機能者である。

○マー モドラシタ チョ。

もう帰られたつて。

五箇の例である。「鳥後」全域でよくおこなわれている。

さて、右の「チョ」は、話題に対する、話し手の、積極的現実的な生活関心を表わしておこなわれるのが一般である。これが、あい似た性格を示す「ワ」「ワナ」を後接させるのは、また、自然合理の結合と言えようかと思う。

○シヨー シチョキャ シンマエー チョワ。

塩をしておけばおいしいつてよ。△あらめを干しながらV

五箇での一例である。

○ゲンキニ ナラシタ チョワナ。

元気になられたつてよ。△病氣回復についてV

都万での一例である。「島後」全域にわたって、「チヨワ」よりも「チヨワナ」による表現が優勢である。両事象とも、だいたい中年以上の女性に多い。

五

以上、隠岐に存立する「ワ」類文末詞をとりあげ、記述してきた。上述のとおり、この類の文末詞の活動は大きく、隠岐の方言表現を支える、大きな柱の一つであると言ってもよいかと思う。なかにあつて、「ワ」「ワナ」は、全域にわたって顯著である。

ところで、「ワ」類文末詞は、山陰本土部にあつても、特色のある存立を見せている。これも、やがて隠岐の事象と、大きく統一的に把握すべきことが要請される。同類の文末詞は、また、国の東西に、事象や地域のかたよりを見せつつも、かなり広く分布しているものようである（藤原先生「日本語方言文法の世界」二〇三頁以下参照）。ひるがえつて、隠岐におけるこれらの文末詞の活力を思うとき、一派の、将来への動向に、深い関心を寄せざるを得ないのである。

むすび

隠岐方言の、「ワ」類文末詞の動態の観察を通して、われわれは、文表現上における、文末特定要素の地位の大きさを、改めて認識することができるのである。

さて、上述の「ワ」類文末詞も、諸他の文末詞と、一定の関連の下に存立していることは、多く言うまでもない。「ワ」類文末詞の繁栄もさることながら、全文末事象それぞれに、特定の表現効果を見せ、あい寄つて、隠岐方言の特性を培っている。

文表現の最後をしめくくつて立つ文末詞の機能は、人びとの表現

心意を反映して、すでに微妙である。これを把握して、日本語表現の真相に迫ることが、刻下の課題とも言えるのである。